

アメリカの剣客「タイガー・モリ」

増山雄三

アメリカのPGAで、度々とグリーンジャ  
ケットを手にし、世界のゴルフ界をリードし  
た、「タイガー・ウッズ」という人物がいた  
が、その名前を日本名に翻訳すれば、「森寅  
雄」となるが、先般、日本ゴルフ杯で優勝し  
た、アマチュアで十九才の「蟬川泰果」も、  
タイガーに憧れ、自分の名にした一人だ。

それで、昔の話になるが、昭和八年の「昭  
和天覧試合」という剣道の試合で、野間恒と  
いう選手が、予選の段階から一本も取られず  
に勝ち進み、最終試合で一本取られたがすぐ  
取り返し、野間の全国優勝が決まった。

それでも彼は病没したので、従弟に野間寅  
雄という人物がいて、本姓は森といたが、  
少年の頃に野間家に引き取られ、恒と共に剣  
術を学んで、二人とも剣術教師が舌を巻くほ

ど、天分を示したのは遺伝によるのだろう。それで幕末のころ、会津飯野藩の剣道指南役として、森要蔵という剣客がいたが、彼は若い頃に千葉道場で学び、やがて名人になつて帰藩したが、そのころ幕府が瓦解し、そのあと戊辰戦争が始まったのである。

それで、森要蔵は時勢とは余り関りはなかつたが、会津藩支藩の士だったので、当然ながら、対薩長戦争の渦に巻き込まれ、戊辰最大の悲劇である、会津若松城の籠城戦に参加して、彼は支藩の兵を率い、城の郊外にあつた、雷神山の守備隊長になつた。

その時、官軍の大將は土州の板垣退助で、彼らは雷神山を囲み、山麓から山上めがけて大砲を撃ちこみ、更に大規模な銃撃を加えたので、森要蔵は隊員の大半を失い、攻めのぼる官軍に対し、要蔵とその息子の寅雄が先頭に立って、斬りこみをかけるしかなかった。

この「森寅雄」はまだ十五才の少年で、白い陣羽織に義経袴をはき、父の要蔵が危なく

なると駆け付けその囲みを破ったが、両人の奮闘を山麓から見上げていた板垣は、銃撃を止めさせ、そんな父子を死から救った。

この森要蔵・寅雄が奮闘していた光景を、会津藩士の子で、白虎隊に参加し、維新後に渡米し後に東大総長になった、山川健次郎という人物が目撃していたが、彼は森要蔵親子の話をするたびに、涙を流したという。

ところで、野間道場で稽古をしていた頃には、寅雄の方が恒よりいささか強かったというが、先の天覧試合当時、東京府内での両人は、群を抜いて強かったので、最終決定戦で立ちあった時、意外にも寅雄が二本取られて破れたのは、恒に勝ちを譲ったのだ。

その後、寅雄は野間家を出て、森姓に戻って森寅雄になり、二十三才になった昭和九年に、日本を脱出して渡米し、サンフランシスコに着いたが、就職のあてもないので、日本人が経営する、オレンジ園で働いた。

そのあと職を転々としたが、その間、剣だ

けが身についた技術のこの天才にとって、日本の剣術が忘れられなかったらしく、師匠も稽古相手もないまま、棒を削って木刀を作つて、農園の片隅でそれを使い、密かに自分の技を、工夫していたのである。

その時、白人の友人でダニエル・ソーントンという男と知り合ったのが転機になり、アメリカにフェンシングというものがある、と教えてくれただけでなく、ロサンゼルス、フェンシング・クラブに連れていってくれた。

そして、クラブの幹部と試合しても、全く歯が立たなかったのは、突く事を知らなかったからで、それをソーントンが教えてくれ、貧乏な寅雄のため、道具一式を買ってくれた。

剣術には突きはあったが、フェンシングはもっと単純で、切っ先が点になるという運動なので、そう理解して我流で練習し、その後クラブに乗り込み、彼を惨敗させた相手と立ち会って、今度は、完膚なきまでに勝った。

その一年後には、もう一度ロスアンゼルス

の、YMCA道場へいき、日本剣術の技術を彼なりにフェンシングに意識し、剣術の受けで相手を誘い込み突いた結果、六人を相手に体を触れさせる事なく、全員をことごとく下し、彼をこの道で有名にしてしまった。

それで、その翌年、ロサンゼルス選手権試合に出場して優勝し、引き続き全米大会に出てこれも優勝したが、それは、彼が渡米してから、僅か二年足らずの事であった。

そんなこともあって、寅雄の寅をとって、「タイガー・モリ」という名は、アメリカのフェンシング界では知らぬ者はなくなり、昭和十一年のベルリン・オリンピックには、アメリカのフェンシングチームの、非公式ながら、コーチを頼まれるまでになった。

が、戦争が始まり、昭和十六年から、日本人は收容所暮らしになり、寅雄はコロラド州の收容所に入れられてしまったが、この收容所生活は、彼にとって、東西二つの剣術について、の思念を、深める事に役立った。

それは、彼はアメリカにきて剣術を離れたが、術を離れる事によって、かえって道を知ったと、晩年の寅雄はよく言ったといい、彼の開眼はこの時期かららしいが、フェンシングというものは、どうやら勝つだけの技術の様に見えるが、剣道というのは、己を鍛えるためのものである、ともいつている。

そして彼は、「私は日本への憎しみがあるが、しかし憎しみが深まるほどに、自分の日本人であることが深まった。また私はアメリカに来て、日本人として孤独になることにより、かえって武士道を知ったと思う。もしあのまま日本におれば、武士道というものが、一体どのようなものであるかを、恐らくしることがなかったに違いない」ともいう。

それで時代は戦後になり、戦前もそうだったが、戦後の彼らの暮らしも豊かではなかったため、寅雄は証券や保険のセールスマンをしたが、日本会の事務をして生活の糧を得てきたが、その間、日本へ旅行をしたりしたも

のの、帰米して、彼は日本は既になくなってしまった事を、何となく思った。それで、日本がなくなつた以上、彼は自分が日本人になろうとし、それには剣の道を磨いて、それを残す以外にないと思つただけでなく、それをアメリカで残そうとした。そこで、「アメリカ剣道連盟」という組織を興し、その会長になり、それが、彼の日系アメリカ人として、唯一の肩書だつたとはいへ、しかし、アメリカのフェンシング界は、彼を捨てておかず、ローマ五輪で正式コーチを委嘱され、選手団を率いローマへ渡つた。ところが森寅雄は、一九六九年一月八日、ロサンゼルス彼の道場で居合術を教えている最中、抜刀した瞬間、心筋梗塞で剣を抜いたまま倒れ、五十四才の生涯を終わってしまった。告別式は仏式により、ロスのコイヤサン・ホールで行われ、喪主は妻貞子と、読売新聞の死亡欄に、小さくでただけである。

令和四年九月